

## 憲兵のご恩返し

鹿児島県 竹添 寿

八十六歳の私は、四十三キロの体重に鞭打ち、毎日習い覚えた竹細工の技術を生かし、竹籠や竹とんぼ、凧作りで大人や子供たちを喜ばせ、社会奉仕の一端にと努力しております。戦時中憲兵でありましたので、第一線に配属されることもなく内地勤務でありましたから、命を長らえることが出来ました。

そして内地勤務では東京大空襲、福岡空襲に遭遇し、一般の人々の悲惨な苦しみを目の前にして、戦争の悲劇を二度と繰り返してはならないと切実

に感じました。第一線で戦死なさいました方々、爆弾や艦砲射撃で死亡なさいました方々の、安らかなご冥福をお祈りしながら、平和を守り祖国再建に努力するのは、我々命を長らえた者の使命である、肝に銘じ六十年間頑張りました。私は今、六十六年前入営した時からの歩いて来た道の思い出をたどっておりますが、薄れゆく記憶の中から思い出すのは大変です。

私の先々代は、熊本県天草郡橋本町より鹿児島県出水町へ開拓団として緒方の姓を名乗り入国しております。その後竹添の姓を頂き、出水郡大川内村上大川内二五七番地にて精米業兼農業を営んでおりましたが、昭和十（一九三五）年四月より大口市山野町四二九二番地に移動し、ここに定住

しました。

私は山野高等小学校高等科二年生に編入、昭和十二年三月、高等科三年生を卒業し青年学校に入學しました。その当時は、田舎では青年学校に入學し軍事教練等の指導を受けておけば、兵隊に入隊しても役に立つと、若い者は青年学校に入學しておりました。青年学校は農業をしながら勉強が出来たからです。

昭和十四年九月、徴兵検査を受けましたが残念ながら第一乙種合格でした。

昭和十二年七月七日勃発しました支那事変の戦禍は支那大陸に拡大し、ノモンハン事件等も発生し、若い人たちが現役兵、召集兵として出征されるのを度々見送りをしておりましたので、甲種合格になつた人が羨ましくなりませんでした。先輩の人達から「心配するな第一乙種もすぐ入営になるから」と、慰められて「ほっと」しました。

出征することは男子の本懐、武門の誇りと称賛された時代ですから、徴兵検査が済むと即入営と

憧れる時代でもありました。特に青年学校での教育もそのような教えでしたから……。一日も早く御国のためにお役に立ちたい気持ちでいっぱいでした。

ただ心配になりましたのは家族のことでした。五人兄弟の長男であります私が入隊したら、精米業と農業に朝星夜星を眺めて一生懸命働いて四人を養育している両親の苦労を考えますと、男の働き手を失うことがどんなに辛いことであろうか！口には出さず黙々と働いている姿に涙の出る日もありました。

昭和十四年二月五日、「福岡市東公園に集合せよ」との令状を頂きました。さあいよいよ入営だ。両親も涙かくして「体に気をつけてがんばれよ」と励ましてくれました。

山野町からは三人入営することになっており、各家の前には「祝入営」の旗が立てられ、当日は近隣の皆様方の「万歳！ 万歳」の声に送られて出発しました。三人共感激の涙を流しました。い



のご配慮もあって、補助憲兵的役目を与えて頂き、部隊内外の警備に当らせて頂きました。部隊の外に出ますと、日々国際情勢が厳しくなることが感じられました。

支那事変も支那大陸全土に拡大し、台湾でも緊張した空気が高まって来ました。支那大陸に近く、物資の中継地でもあり慌ただしくなって来ました。十二月八日、終に大東亜戦争が勃発し部隊内も緊張が高まりました。通信班には様々な情報が入って来ますが、公表されません。兵隊には上司からの報告だけしか知ることは出来ませんでした。南方攻撃作戦のため内地本土からの兵力輸送には、基隆港か高雄港が寄港地になり、物資の積み込み等で多忙になった様子でした。

昭和十七年七月に入って、人事係准尉殿から東京の中野憲兵学校への派遣を命ぜられました。試験もなく命ぜられたのは、補助憲兵も経験したこともあり、通信部署にも経験があつたからではないかと私なりに判断し、部隊から一人、七月九日

件はありませんでした。国民も勝つまではと一つの目標に向かつていた時代でもありましたので、私のような者でも憲兵の仕事が出来るのだと軍務に精励しました。街に出ますとあちこちで、赤紙の召集により出征する人々、それを目の丸の小旗を振って見送られる姿が増えて来ました。しかし昭和十七年十二月には南方戦線で連合軍の反撃が始まり、小さな島を守備する日本軍の苦戦も伝えられるようになり、十二月四日、学制の短縮も決定されました。昭和十八年二月に入ってガダルカナル島の撤退、四月には連合艦隊司令長官山本五十六大将の戦死、五月にはアッツ島部隊の玉碎と戦局は深刻になってきました。

このような状況の中では、何が起るか目が離せなくなり私達の任務も重大になりました。種々の情報が飛び込んできますが内密にしておかねばならない辛さもありました。食糧も配給制度の上、衣類も派手なものには着てはならない。男子は国民服を着用せよと衣類も制約を受けるようになり、

に第二次教習兵として入校しました。

中野の憲兵学校は大きな建物で、全国から優秀な人材が派遣され、教育と訓練が行われ、難しい法規の勉強や拳銃の扱い方や射撃、逮捕術の訓練等を、四カ月間勉強し、何とか十一月二十三日教習を終了し原隊に帰りました。

十二月一日、憲兵兵長に昇進し、同日付で大阪憲兵隊和歌山憲兵分隊付を命ぜられ着任しました。分隊の人数はわずかでしたが、馬二頭とサイドカー一台が配置されてありました。仕事は治安の維持と共に、身元調査を行うことで、初めての仕事で気を使いました。軍隊の学校に入学する人の家庭調査や軍人と結婚する人の家庭調査等も行いました。時々「憲兵」の腕章をはめ、馬に乗って街中を巡回することも仕事の一つでした。幸い山砲部隊で馬の手入れの経験もあつたし、毎朝馬に乗る訓練もしていたので助かりました。

昭和十七年七月頃は、南方でも連戦連勝で国民も歓喜した時でしたから、私達の仕事も大きな事馬に乗って街中を巡回するのに気を使わねばなりませんでした。

戦地からも戦死された方々の無言の帰還も日ごとに増加し、迎える家族の姿を度々目にし、戦争の激しさが想像されました。銃後の人々の志気を鼓舞するため「軍艦マーチ」や「軍国歌謡」も流れてきますが、街行く人々の顔が次第に厳しく見えました。

昭和十八年十一月二十日、私は特設憲兵隊第四分隊付となり、東京の中野憲兵学校で無線探索の訓練を受け、樺太の北緯五〇度の南三〇ぐらい近くにある上敷番という小さな町の憲兵分遣隊で勤務することになりました。任務は無線による短波の通信が乱れ飛びアメリカ、ソ連等各国の暗号情報を傍受し解読することと、発信個所の発見が任務でした。

三人の者が同じ受信機で受信した電波を、もう一人が三百メートル離れたところで、私達が受信した電波を送ると発信した方向が判明するという

方法で、暗号スパイの電波を採集しました。外国語に通ずる人もおりましたし、特にソ連に向けて日本本土から発信する怪電波に重点をおきました。

昭和十八年十二月一日、憲兵伍長に昇進しましたが、樺太の冬は寒くて苦勞しました。上敷香町の分遣隊に勤務して一カ月ぐらいたった頃、スパイが発信する電波が千葉県市川市付近から出てることが判明し、私達は通信所を東京都葛飾区柴又の帝釈天のお寺に移し、昼間は国民服を着て空家やアンテナのある家を探しました。夜は受信機で受信しながら採集に努めていましたが、モスクワやシベリアのチタと交信しているのを発見し、交信が済むのを待ってその家に踏み込み、新聞記者一人を逮捕しました。

この頃は外国人、日本人のスパイが発見されないようにと、巧妙に法の網を潜り抜ける手法をとっており、発見するのに時間が掛かりました。通信施設を東京都小石川の原町に移し、無線による搜索を続行しました。

た。一万メートル上空のB 29に向かって迎え撃つ対空高射砲は届かず、焼夷弾の雨に地上の建物が次々と破壊されました。二十七日、二十八日と連続しての昼間の空襲、二十九日は初めての夜間空襲で大騒動でした。発信地はマリアナ基地らしいとの情報でした。

十二月一日憲兵軍曹に進級しました。十二月に入ってから、東京だけでなく名古屋付近も数回空襲を受けております。

昭和二十年一月になってからは、横浜、大阪、大村、三重、和歌山と軍需工場所在地は次々と空襲を受け被害は甚大となりました。一月二十七日は東京の上野、千住が空爆を受け、建物は破壊され無惨な姿になりました。

二月に入ってから、B 29だけではなく航空母艦から艦載機数百機が、日本本土各地を波状攻撃するようになり、制空権をなくした日本は、米軍機の思うがままに荒されるようになりました。

三月四日、B 29二百機により本郷、巣鴨地区が

この頃には南方戦線は連合軍の反撃が強くなり、南方の島々もアメリカ空軍による空爆が激しくなり、三月には学徒動員実施要綱が決定され、七月七日にはサイパン島が玉砕、七月十八日には東條内閣総辞職、連合軍がグアム島へ上陸と、入って来る情報は暗いことばかり、うかつに外部に洩らすと大変なことになるので、じつと辛抱せねばなりませんでした。

七月二十九日には満州国の大連、鞍山方面もB 29の空襲を受け、八月十日には北九州、十一日は長崎がB 29の空襲を受け、アメリカ空軍はいよいよ日本本土の空襲を始め、こりや大変なことだと心配になってきました。八月二十三日女子挺身隊勤労令公布、学徒勤労令公布、特に働ける若者総ぐるみの決戦となり、軍需工場や海軍工廠の航空廠にと動員が始まりました。

十一月二十四日、B 29約百機が昼間東京を初空襲、目標は三鷹の中島飛行機工場のようなのでした。初めての空襲警報のサイレンに大騒ぎとなりまし

空襲を受け、三月十日夜中には三時間余りにわたるB 29数百機による夜間空襲が行われました。江東区、台東区、墨田区一帯が火の海と化し、火煙は空を焦がすように燃え広がる中、空襲警報のサイレンの音、B 29から投下する焼夷弾の唸り声、落下した爆発音、対空砲火の音、火の海の中を身体一つで飛び出して、家族を呼びかけて泣き呼ぶ声、まさに阿鼻叫喚の生地獄の様相でした。世にいう東京大空襲です。戦場の第一線の状況は経験しておりませんから、その様子はわかりませんが、老若男女区別なく逃げ回る姿は、第一線以上の悲惨な姿と思いました。

一万メートル以上の高空を悠々と飛行しながら焼夷弾を次々と投下するB 29に向かって、わずかの戦闘機がB 29の周りを小蜂のように回っているが敵機の装備されている機関銃で撃墜される。見ていて歯痒く思いますが、戦力の違いをまざまざと感じました。

私共の仕事も暗号の解説と共に治安の維持に、

より神経を使わねばならなくなりました。空襲による混乱の中で不平分子の人達がどんなことを計画するか分かりませんので、警戒の目を緩めることは出来ませんでした。

日本国土が至るところ米軍機の空爆を受ける中、東條内閣総辞職、七月二十日小磯内閣が成立し、「大和一致」を掲げ、負け行く戦争に対処されましたが、敗戦の色濃く終に四月五日総辞職しました。

昭和二十年四月二十二日、結婚のため鹿児島県の大口市の実家に帰り、四月二十九日の天長節の日にささやかな結婚式を挙げ、百合を妻に迎えました。私が二十七歳の時でした。五月一日、福岡市平尾台の第三分隊に配属されました。

四月七日、鈴木内閣が登場し、戦局不利の中で日本の存続すら危ぶまれる気運が、ひしひしと迫る感じがしました。九州各地の飛行場も連日空爆されました。六月十九日B 29約二百機が福岡市に襲いかかってきました。東京での空襲を経験して

おりましたが、福岡大空襲も筆苦に尽くし難い悲惨なものでした。

焼夷弾の雨霰、吹き飛ぶ建物、めらめら燃える建物類、パンパン打ち上げる高射砲の弾丸は届かず、迎撃する飛行機も数少なく、逃げ惑う人々、九州一を誇る福岡市も、一波、二波、三波と襲いかかるB 29の前には手も足も出ない憐れな姿でした。

私達自身どうすることも出来ず、一人でも多くの人達の命を守るため、安全な場所への誘導に走り回るのが精一杯でした。物凄いい音をして落ちて来る焼夷弾が、ちょうど自分の頭の上に落ちてくる気がして慌てて防空壕や木の陰に逃げ込むこともありました。

敵機の去った後はまことに憐れなものでした。死者が出る、重軽傷者が出る、その方々の搬出の手伝い、傷の手当の加勢、自分の本務を忘れるほどの慌ただしさでした。

六月二十三日、沖縄本島玉砕、七月五日フィリ

ピンの作戦終了を米軍は発表しました。八月六日広島に新型爆弾投下、死傷者多数、八月九日長崎にも新型爆弾投下、同じく死傷者多数の模様、後でこれは原子爆弾と分かりました。そしてソ連軍満州に進入と、悪い情報ばかりが舞い込んできます。日本は本当に大丈夫かと憲兵分隊の人々も、口には出しませんがみんな諦めた表情でした。

八月十四日になつて種々の情報が飛び交いました。確実な情報は明十五日正午重大発表があるとの情報でした。何の重大発表であろうかと不審に思いました。

八月十五日正午、ラジオから流れてきます天皇陛下の終戦の詔勅を聴きながら、無念の涙が頬を濡らしました。残念ですがこれでよかったのではないかとも思いました。

東京大空襲の時のあの悲惨な惨状、福岡空襲の時の惨れな姿を見てきた私には、二度とあの悲劇を繰り返してはならないと思いました。通信機材の始末や書類の整理等を終え、八月二十六日、鹿

児島県伊集院町の鹿児島臨時憲兵隊付に配属を命ぜられ、この地で空襲により大被害を受けた鹿児島市一帯の治安維持に勤務しました。数回にわたる空爆により、鹿児島市内も焼野原に変わっていました。戦争とはなんと非情で、無情なものであろうかと改めて痛感しました。

九月二十二日兵役を解除され、大口市の我が家に帰りました。両親をはじめ妻も兄弟達も無事帰ったことをみんなで喜んでくれました。仏壇の前に手を合わせ二度と戦争があつてはならない、戦死された方々や、空爆や艦砲射撃で死亡された方々のご冥福をお祈りし、この方々の分まで祖国再建に努力しますと誓いました。憲兵であったために第一線にも配属されず、命を長らえることが出来、また東京大空襲や福岡空襲の悲惨な体験も経験し、人々には分からない情報を知ることが出来ました。

復員後間もなくしてGHQの呼び出しを受け、アメリカ人の二世から憲兵の時の実務を尋問され

ました。種々と聞かれましたが、私は正直に通信系の専門で仕事してきたことを返答しました。仕事が対人関係でなかったためか、結果は即日帰郷を許されました。家庭に帰った私に課された使命は、長男として両親を助け家業に励むことと同時に、若人と共に祖国の再建に努力せねばならないことでした。戦場で戦死された方々、空襲や艦砲射撃で死亡された方々の分まで、我々生き残った者が微力を尽くさねばと胸に刻み今日まで努力してきました。

昭和二十三年四月十二日、妻百合が死亡しましたので六月一日ツタと再婚しました。その妻も昭和五十八年十二月二十一日死亡しました。二人の妻を亡くし深い衝撃を受けました。

昭和四十七年の大水害の復旧工事に従事中、ブルドーザーに接触して左手を負傷し、身体障害者五級に認定されました。その上、昭和五十九年五月十六日、右胸部にペースメーカーを挿入する手術を受けました。人並みの身体ではありませんが、

老人クラブの役員や身体障害者協議会の役員、市社会福祉協会の役員等、多くの方々のお力添えを頂き頑張ってきました。家の中に掲げてある表彰状や感謝状が私の歩いてきた道を物語ってくれております。これも家族一同の者が私を助けてくれたお陰と感謝致しております。

平和の大切さを子供達にも語り伝えながら、竹トンボや凧作りを指導しております。社会へのご奉仕は、憲兵であった私の社会へのご恩返しと今の幸せを大切にして今後も元気でがんばります。

国の為 命捧げし人々の

勲じたたえ 今日も竹編む

爆撃に 家族失いし 人々に

思いをよせて 涙あふるる